「闘病記にみる入院患者の生活様態に関する考察 ホスピス・緩和ケア 病棟の療養環境のあり方に関する研究 その1」に対する討論

(竹宮健司・長澤 泰・山下哲郎著, 日本建築学会計画系論文集,
第503号, 93-99, 1998年1月号掲載)

DISCUSSION ON RESEARCH ACTIVITY PUBLISHED AS "A CASE STUDY ON ASPECTS OF INPATIENT'S LIFE FROM LITERARY WRITINGS: STUDY ON SHELTERED CARE SETTINGS IN HOSPICE AND PALLIATIVE CARE UNIT PART 1"

(Kenji TAKEMIYA, Yasushi NAGASAWA and Tetsuro YAMASHITA,
J. Archit. Plann. Environ. Eng., AIJ, No. 503, pp.93-99, Jan., 1998)

池田 朋子*
Tomoko IKEDA

The following two points should be discussed;

- 1) Takemiya should make clear his purpose and result of the methodology, to improve the methodology of reading spaces and spatial images on texts.
- 2) Takemiya should make clear his own stance to references, to improve the academic development in the field.

Keywords: reference, methodology, analysis on texts, copyright

参考文献、手法論、テキスト分析手法、著作権

1. はじめに

貴論文を興味深く読ませていただきました。テキストを用いた空間分析手法の適用とその有意義な結果に対し、深く敬意を表します。テキスト分析に携わる一研究者として、分析手法が多く場で応用されるのを歓迎しております。筆者らが開発、発展を図ってきた手法が別のケーススタディにも適用されたことは、手法論の発展として非常に喜ばしく、たいへん光栄にも思っています。しかしながら、以下の点について討論が必要かと思えます。

1. テキストを用いた空間分析手法のより一層の進展のためには、1) 貴稿が全編にわたって参考になっている拙稿¹⁾をも、既往研究として位置づける必要があるのではないのでしょうか。2) 拙稿の文章のコピー&ペーストではなく、貴稿独自の表現をすべきではないのでしょうか。3) 上記2点を踏まえ、貴稿の手法論としての目的と結論を明確に述べていただけると、今後の手法論の発展のためによいかと思えます。 2. 一般に学会全体に資するところでもあると思いますので、参考文献の示し方や引用の方法についてどのようにお考えか、示していただけましたら幸いです。

2. 手法論の進展のために

1) 貴稿は、分析の具体的な作業中において、拙稿を「文章のまとまり」を定義している研究と紹介し、参考文献に挙げてくださって

います。しかし貴稿をみると、拙稿の目的、既往研究の評価、定義、分析手法、結論等を全編にわたって参考にはしているには明らかなように思われます。貴稿は「既往の研究とその方法」で、文学作品を用いて建築空間・建築環境を解明した関連研究について述べ、さらに未公開の研究にも触れていらっしゃいます。拙稿は、建築空間ではなく都市景観を扱った隣接分野の研究ではありますが、同じ日本建築学会計画系論文集に掲載された論文であり、学際的、手法論的な立場からも、拙稿を既往研究の中に位置づけたほうが、より有意義な既往研究のレビューになったのではないのでしょうか。

2) さらに貴稿中で、拙稿の文章を忠実に繰り返している箇所が幾つか散見されます。筆者個人としては、それだけ拙稿の思潮に賛同されているとも思えて嬉しくもありますが、しかし一般的常識的に考えますと、引用するのならば引用箇所と引用元を明確にすべきであり、引用でないならば学術の発展やオリジナリティの付与という観点から、別分野とはいえ拙稿とこれほど似た文章を拙稿発表後5年後に繰り返している論文のオリジナリティをどう評価すればいいのかという疑問に直面してしまいます。一般に論文の文章は似てくるものだと思っていますが、レトリックとシニフィアンを含む文体がこれほど似ていると、信じたくはありませんが、どんな手違いがあったにせよ結果的に発表されたものは、コピーされていると思われるを得ません。貴稿が拙稿を参考文献に挙げて以上、拙稿を

* 日本学術振興会 特別研究員・工博

Research Fellow of Japan Society for Promotion of Science, Dr. Eng.

知らずに偶然似た文章ができたのではなく、貴稿が拙稿を参考に書かれたのだと思っています。このようなコピー＆ペーストは、著作権を侵害する²⁰⁾のみならず、せっかくの有意義な御研究を安直とみなされる危険性を有しているのではないのでしょうか。たとえ拙稿の論旨と展開、表現にいかんが賛同されたにせよ、貴稿には貴稿独自の手法論的目的や結論があったと考えます。その最適論と表現を模索すべきではなかったのでしょうか。このような点からも、1)で述べたように拙稿を既往研究として位置づけておく必要があったかと思われまします。以下に文章が酷似している箇所を示します。

[1-1] 貴稿中の表現

p.94左L9-16 1.研究の背景と目的(3)研究目的

しかしながら、次項でみるように、闘病記中の環境描写を建築計画の分野から読み取る系統的な方法論は確立していない。したがって本稿ではまず、既往研究および闘病記の性質を踏まえて、闘病記から環境描写を読み取る方法を考える。そのために一作品をケーススタディとして取り上げ、その読み取りをすすめながら、闘病記中の環境描写を分析する手法を具体的に検討する。またそのような方法で分析した描写から何が明らかにされたか、闘病記中の環境描写をみる意義および手法の限界を考察する。

[1-2] 拙稿中の表現

p.122左L13-22 1.研究の背景と目的

しかしながら、次章(2-1)でみるように、文学作品中の空間描写を都市計画の分野から読み取る系統的な方法論は確立していない。したがって本論文ではまず、既往研究および文学作品の性質を踏まえて、文学作品から空間描写を読み取る方法を考える。そのために一作品をケーススタディとして取り上げ、その読み取りを進めながら、文学作品中の空間描写を分析する方法を具体的に検討する。またそのような方法で分析した描写から何が明らかにされたか、文学作品中の空間描写をみる意義および本論文における方法の限界を考察する。

[2-1] 貴稿中の表現

p.94左L30-32 2.研究の方法(1)既往の研究とその方法

若山の手法は、作品中に表れた建築用語をすべてピックアップし、その頻度を調べ、その用語がどのような場合に使用されているかという文脈を調べる方法を探っている。

[2-2] 拙稿中の表現

p.122右L28-38 2.研究の方法(1)既往研究とその方法

いっぽう若山²¹⁾は、……(中略)……作品中に現れた建築用語をすべてピックアップし、その使用頻度を調べ、またその用語がどのような場合に使用されているかという文脈を調べる方法を探っている。

[3-1] 貴稿中の表現

p.95左L9-18 2.研究方法(5)本研究の性格と分析の方法 2)「場面」と文章のレベルで読む

大江が述べているように、文学作品は、言葉、文章、文章のまとまりと「さまざまなレベル」で成り立っており、最も重要視されているのは文章のまとまりのレベルだと考えられている。²²⁾

既往の研究では、読み込む際の「文章のまとまり」は定義されずに行われるものが多いが、池田らは文学作品から都市景観を分析する際に定義を行っている。²³⁾ここではそれらを参考にして、分析の中心となる「文章のまとまり」のレベルを、施設環境の読みとりという視点から、「場面」という観点で設定し、場面に対応する文章群を、文章の一まとまり、と定義する。ここで「場面」とは「テキスト中で視点場および時間が連続して認識される空間」とする。

[3-2] 拙稿中の表現

p.123右L29-p.124左L15 2.研究の方法(4)研究対象の性格と分析の方法 「場面」と単語のレベルで読む

大江が述べているように、文学作品は、言葉のレベルで、文章のレベルで、文章のまとまりのレベルで、また作品のレベルで、と『さまざまなレベル』で成り立っていて²⁴⁾、その『さまざまなレベル』のうち、最も重要視されているのは、文章のまとまりのレベルだと考えられる²⁵⁾。……(中略)……文章のまとまりのレベルは読み取りの視点により無数に設定できるが、ここでは分析の中心となる「文章のまとまり」のレベルを、都市空間の読み取りという視点から、「場面」という観点で設定し、場面に対応する文章群を、文章の一まとまり、と定義することにする。ここで「場面」とは、「テキスト中で視点場および時間が連続して認識されている空間」と定義する。

[4-1] 貴稿中の表現

p.99右L4-7 5.結論(3)課題と展望

今回明らかにしたのは、一作家による一作品の中に記された環境描写をもとにし

た相互浸透的な様態の一部である。他の手法による分析や他の作家による作品における様態等と比較してこのような手法の信頼性について考察する必要がある。

[4-2] 拙稿中の表現

p.129右L29-33 4.結論(3)課題と展望

今回明らかにしたのは、一作家による一作品の中に表現された景観構造である。他手法による景観構造や他作家による作品の景観構造等と比較し、文学作品中の景観認識構造がどこまで普遍化できるかについて、考察する必要がある。

3) 上記2点に述べたように、拙稿を既往研究として位置づけないまま、目的、方法、結論等を参考にした結果、参考文献の手法的成果と貴稿の手法的成果が曖昧になっていると感じられます。このような状態で、貴稿が論文全体において手法論的な成果を上げることをも目的とし、結論を述べているのは、方法論の目的と結論として不的確で公正さに欠けると見なされてしまうのではないのでしょうか。貴稿は拙稿を含む幾つもの既往研究の成果をもとに、さらにオリジナルな分析手法や、様態といった観点を新たに加え、的確かつ明解、緻密に実際の空間の1ケースを分析され、非常に有意義な結果を得られています。テキスト分析手法の開発者の一人として、このような手法の発展を大いに歓迎しております。しかしだからこそ、上に述べたような貴稿のすばらしい成果が、安易なコピーとみなされ正當に評価されないのではないかという状況を愚直にも危惧しております。そこで、誠に僭越かと思いますが、拙稿の手法論を位置づけた上で、貴稿の分析手法論の目的と結論を御自分の言葉でお書き下されば、今後の手法論の進展に非常に貢献すると思います。

3. 参考文献の示し方について

前項では、貴稿と拙稿のオリジナリティの問題について述べてきました。一般に学術の世界が既往の成果物の上に成り立っていて、参考文献の問題が微妙であることは充分承知しております。しかし、それと同時に、学術分野は厳格にオリジナリティを追究すべき世界でもあると思っております。というのも、既往の成果物と新しい成果物とを把握しなければ、どれだけ前進したかが明確にならないからと理解しております。何の間違いにせよ、日本を代表するような学府の研究者の方々が、学術論文の基本であるはずのオリジナリティにあまり配慮のない論文のまとめ方をされたように思われ、残念に感じています。このような憂慮が筆者のただの思い過ごしであり、未熟さからの誤解であると指摘されれば、一研究者として大いに勉強になることでしょう。そこで、2番目のお願いといたしまして、一般に参考文献の適切な示し方や引用の方法、許容範囲を公に確認することは、学会全体に資するところでもあると思いますので、できましたら御考えを示していただけないでしょうか。

筆者は自身の若輩さをよく承知しておりますが、この点を公に確認するという意味でも、こうした公開討論という形を取らせていただきました。本学会と、貴殿の療養環境のあり方に関する一連の研究、テキストを用いた空間分析手法のさらなる発展を願ってやみません。

1) 池田朋子、紺野昭：文学作品中の空間描写から都市・地域景観を読み取る方法に関する研究 小説『城のある町にて』をケーススタディとして 日本建築学会論文報告集第450号(1993年8月) pp.121～130

注1) 著作権法第10条により、論文は著作物である。第32条「公表された著作物は、引用して利用することができる。この場合において、その引用は、公正な慣行に合致するものであり、かつ報道、批評、研究その他の引用の目的上正当な範囲内で行われるものでなければならない。」第48条(第32条の規定により著作物を複製する場合)「著作物の出所を、その複製又は利用の様態に応じ合理的と認められる方法及び程度により、明示しなければならない。」

(1998年2月23日原稿受理、1998年5月21日採用決定)